らっきー・らてぃっしゅ・ぱーてぃ

1

「……え？」

いつものように上村くんの家へ行った私は、驚いて目を見張った。

部屋の中では、美しいゴールデンレトリーバー、私が愛するラッキーが行儀よくお座りして、つぶらな黒い瞳で私を見つめている。

それはいい。問題は、ラッキーが三頭いるということだ。

「ラッキーが……分裂増殖してる？」

あの夏休み以来、私と上村くんは一緒に帰ることが多い。だからクラスメイトからは、すっかり「恋人同士」と公認されてしまっている。

まさか、本当の恋人はゴールデンレトリーバーのラッキーで、私はラッキーともども上村くんのペット……だなんて、誰も思わないだろう。

いつも、一緒に散歩して。

時々……というかしょっちゅう、エッチして。

その時には、首輪と耳と尻尾を付けられて、牝犬扱い。

人間としての尊厳はどこへ行ってしまったのかと思わなくもないけれど、正直なところ、それがけっこう気に入っていた。

ラッキーとするのも、上村くんとするのも、すごく気持ちよくて。

ラッキーは私のことが大好きで。私はラッキーが大好きで。

上村くんとの間に恋愛感情があるのかどうかは微妙なところだけど、少なくとも、愛情を持って接してくれている。たとえそれが、ペットへの愛であったとしても。

だから、ペットとして扱われることに抵抗は感じていなかった。

上村くんと私の関係には、はっきりと口には出さないけれど明確なルールがあって、普段、学校などでは普通に仲のいいクラスメイトとして接している。一歩上村くんの家に入って、ある瞬間か

ら、私は彼のペットになるのだ。
大抵の日は学校が終わると一緒に帰るんだけど、今日は私が委員会の用事があって、上村くんはなんだか用事があるらしく急いで帰ってしまったので、私は遅れて彼の家へ行った。
そして――

「ラッキーが……分裂増殖してる？」
「なにバカなこと言ってんだ」
私のつぶやきに、上村くんが笑う。
でも……だって。
目の前には、まったくそっくりなゴールデンが三頭。
まったく同じポーズで座っている。
「ラッキーと一緒に生まれた兄弟たちだよ。こいつが長男のエース。ラッキーが次男で、三男がラッシー」
「ああ……なんだ」
そういえば、聞いたことがある。

ラッキーは、親戚の家で生まれた仔犬のうちの一頭だって。何匹も生まれた仔犬を、親戚内で分けたんだって。
「あー、びっくりした」
「……っつーか。どうやったら分裂増殖なんて発想が浮かぶんだか」
「いいじゃない。私は想像力が豊かなのよ」
馬鹿にしたような口調に、私はぷぅっと膨れた。
「でも、どうしたの急に？　ラッキーの兄弟たちなんて連れてきて……」
そこまで言って、はっと気づいた。
思わず、部屋の扉のところまでささーっと後退る。
「ま、まさか上村くん！　よ、４Ｐとか、そーゆーすごいアブノーマルなこと考えてるっ？　だ、ダメだよ、私っ！」
つぶらな三対の瞳が、じっと私を見つめてる。あの瞳に見つめられるだけでドキドキして、身体の奥が熱くなってきちゃいそう……だけど、ダメダメ。

犬とエッチするってだけでも十分すぎるくらいにアブノーマルなのに、しかも乱交だなんて。
第一、いつもラッキー一頭の相手をするだけでヘトヘトになるのに、三頭だなんて。
「そ……そんなにしたら、死んじゃうよぉ」
「……」
何故か上村くんは、無表情に私を見ている。少し、呆れているようでもあった。
「委員長、またなんか勝手に思い込んでるな？　伯父さん家が一家で旅行に行くんで、その間預かったんだよ」
「え？　あ……？　あ、なんだ、そうなの？　あははー、やだ、私ったらてっきり……」
笑ってごまかす。また、エッチな想像をしてしまった。
どうして、すぐに考えがそっちに行ってしまうんだろう、私ってば。
でもそれは、半分以上上村くんの責任だと思う。
彼はクールな外見とは裏腹にすごくエッチで、私にいろいろと恥ずかしいことをして楽しんでいるのだ。
だけど、先刻の台詞は失言だった――そう気付いたのは、上村くんがにやっと笑って立ち上がった時だ。
「４Ｐか、それも面白いな」
不穏な空気を感じ取って、私は背後の扉にびたっと張り付いた。
上村くんが近付いてくる。
「よかったな委員長。今日は、たっぷりと楽しめるぞ。明日は休みだし、少しくらい遅くなってもいいよな？」
「だ……、だめだめ！　無理だよ！　そんな……ホントに壊れちゃう！」
「委員長」
上村くんの声が、少し低くなる。
ゆっくりと腕を上げる。その手が持っているものを見て、私は動けなくなった。
紅い、革製の首輪。大型犬用の。
私の名前を彫った、小さなメダルがついている。
「あ……」

手が、首に回される。
皮の感触。
メダルを下げている短い鎖が、鈴のような音を立てた。
顔が、かぁっと熱くなる。
首輪を付けられてしまったら、私はもう完全に上村くんのペット。
逆らうことはできない。
それが、暗黙のルール。
この二ヶ月ほどの間に、すっかり身体に染みついてしまった習性。
身体が、微かに震えている。
「リカ」
首輪を付け終わった上村くんが、一歩離れて私の名前を呼んだ。
もう「委員長」ではない。
上村くんのペットの牝犬「リカ」でしかない。
「……はい」
私は小さくうなずいて、制服のスカートに手をかけた。

微かな衣擦れの音とともに、スカートが足下に落ちる。
続いて、セーラー服。ソックス。そしてブラ。
いつものことなのに、もう何十回も上村くんの前で全裸になっているのに、最後の一枚はどうしても躊躇してしまう。
だけど上村くんは、犬に服を着せる趣味はない。
私は小さく深呼吸して、パンツも脱いだ。
「よし」
セーラー服を手際よくハンガーにかけてくれていた上村くんが、また側に来る。頭に、付け耳を付けられる。
私はその場に膝をついて、そのまま四つん這いになった。
裸で、首輪と耳を付けて。
本当に犬みたい。
だけど、まだ足りないものがある。
「ひゃん！」
お尻に触れた冷たい感触に、思わず声を上げた。
上村くんの手が、お尻の……一番触れられたく

ない部分を撫でる。
冷たくて、ぬるぬるとした感触。
ジェル状のローションが、たっぷりと塗り込まれる。
私はきゅっと唇を噛んで、次に訪れるものに備えた。
「ん……、くぅん」
お尻の穴の部分に、指よりも固くて太いものが触れる。
ゆっくりと、しかし力強く押し付けられる。
「ぅん……くっ、ふぅ、んっ……」
堪えようとしても声が漏れる。
少しずつ少しずつ、お尻の穴を広げて、私の中に侵入してくる。
そう。それはかなり太めのアナルバイブ。ふさふさの尻尾の縫いぐるみが付いた、エッチな付け尻尾なのだ。
長浜梨花という人間を一匹の牝犬とする、最後の仕上げ。
無意識の抵抗を続ける括約筋を押し広げて、どんどん深く入り込んでくる。
「うぅ……んん、くっ……ふぅぅ――――」
根本まですっかり埋まったところで、私は大きく息をついた。
ラッキーの毛皮と同じ、鮮やかな山吹色の尻尾だけが、私のお尻から生えている。
何度入れられても、やっぱり慣れることはできない。
この、不思議な感覚。言いようのない異物感。
全身を貫くような快感を伴う、膣への挿入とは違う。
収縮しようとする筋肉が、強引に引き延ばされる鈍い痛み。
苦しいような、だけどじんわりと全身に広がっていく快感。
私のあそこをしとどに濡らしているのは、お尻から流れていったローションではない。身体の奥から湧き出してきた、私自身のエッチな蜜だった。
「は……ぁ、ん」
潤んだ瞳で、縋るように上村くんを見上げた。

笑っている。
私にエッチなことをしている時、彼はいつも楽しそうだ。
「始めてもいいか？」
「……うん」
小さくうなずくと、上村くんはまた私のお尻に手を伸ばした。
「――っ！　あぁっ！　あぁぁぁっ！　あぁんっ！」
くぐもったモーターの呻りとともに、私の体内にある異物が妖しく蠢きはじめる。
私は思わず身悶えした。
その動きは尻尾に伝わる。
私はパタパタと尻尾を振って。
あそこからは発情した牝の匂いを振りまいて。
若い牡たちを誘っていた。

2

「ラッキー。まずはお前が手本を見せてやれよ」
上村くんが言うのと同時に、ラッキーが私の後ろに回る。
「ひっ……ん、くっ」
冷たい鼻先が、あそこに押し付けられた。長い大きな舌が、陰唇を割ってもぐり込んでくる。
「あっ、ふっ……んんっ！　くぅっん……」
その部分は、お尻への刺激のためにもう十分すぎるくらいに濡れそぼっていて、くちゅくちゅ、ぴちゃぴちゃといやらしい音を立てる。
長くて、大きくて、しなやかに動く舌。
割れ目の隅々まで余すところなく舐め回して、中にまで入ってくる。
私は嬌声を上げた。
器具でお尻を犯されながら、大型犬に秘所を舐められる快感。大きな舌全体でクリトリスを舐め上げられる時、全身に電流が流れるようだ。
普通の女の子なら決して体験することのない、めくるめく世界が私を魅了する。
この素晴らしさを知らない女の子たちが、可哀想に思えてしまう。
ラッキーの鼻先にお尻を押し付けて小刻みに振る。
どんどん、昇りつめていく。遙かな快楽の高みへと。
「あぁ……っ！　あぁっ！　あぁ――っ！」
最初の頂にたどり着くのには、わずかな時間しか要しなかった。
私は大きく息を吐き出し、一瞬、全身が弛緩する。
同時に、ラッキーが私の上にのしかかってきた。前脚が、私のウェストにしっかりと回される。
「ねぇ、来て……ラッキー、私の中に来て！」
甘えた声で誘うまでもなく、ラッキーは腰を前後に振りはじめている。毛皮の下から顔を覗かせたペニスが、私のお尻や内腿に当たる。
「ん……んっ！」
私も微妙に腰を動かして、自分から迎えに行く。

もうすっかり準備の整っていた私の膣は、すんなりとラッキーを受け入れた。
最初の頃は少し手間取ったりもしたけれど、今では私もラッキーもすっかり慣れたもの。スムーズに結合することができる。
「ふ……あぁっ、あぁっ！」
激しいピストン運動。私の中で、ラッキーが暴れている。
擦れ合い、絡み合う粘膜。
一突きごとに、私は声を上げていた。
ラッキーの長いペニスが、膣壁全体を擦り上げる。私はそれをきゅっと締め付ける。
抵抗するように、ラッキーの動きにさらに力強さが加わった。
「はぁっ、あっ、はぁっ！　はっ、あぁっ！　あぁんっ！」
私の中で、ラッキーが大きくなっていく。一番深い部分までしっかりと届いて、お腹の中をいっぱいに満たしている。
膨らみはじめた瘤が、あそこに押し付けられた。
上村くんの指が、乱暴に私を広げる。痛いくらいにまで広げられたところで、私は自分から瘤をつかんで押し付けた。
「んっ……、くふっ、んっ……んぅっ！　あぁぁぁっ！」
膣口が一瞬、裂けるぎりぎりまで広がって、大きな丸い固まりが通り抜ける。
その一瞬の痛みさえもが気持ちいい。
私の中にすっぽりと収まった瘤が、さらに膨らんで膣壁を刺激する。
「あぁぁっ！　いぃっ！　いぃぃっ！」
あまりの快感に、私は激しく頭を振った。最近少し伸ばしはじめた髪がばさばさと揺れる。
気持ちよくて、気持ちよくて。
気が狂いそうだった。
熱い精液が流れ込んでくる。
長いペニスと大きな瘤が膣内を一分の隙もなく占領しているため、溢れ出た精液はきわめて効率的に、無駄なく子宮へと注ぎ込まれている。
この頃になると私はもう無我夢中で、何もわか

らなくなっている。ただただ、気の遠くなるような快楽に身を委ねているだけだ。
何度も絶頂を迎える、なんて生やさしいものじゃない。この間ずっといきっぱなしと言ってもいい。
頭が真っ白になって。
身体中の神経が過負荷に耐えかねて、焼き切れてしまうような感覚だった。
それがいつも一時間前後も続いて。
ようやく解放された時には、私はヘトヘトになって涙と涎と愛液を垂れ流しているのが常だった。

＊　＊　＊

「や……ん、あ、だ……め……」
ぴちゃぴちゃと湿った音がする。
朦朧とした意識の中で、自分が舐められているのだと気がついた。
その行為が、爆発的に燃え上がってようやく鎮火しかけていた私の中の炎に、油と新鮮な酸素を送り込む。
私の身体はすぐに反応をはじめた。
いつもそうだ。
ラッキーとの行為は肉体的にも精神的にもものすごく疲れるはずなのに、終わった直後はむしろ普段よりも感度が上がっているように思う。
だけど――
今、私を燃え上がらせているのは、ラッキーじゃない。舐め方が、なんとなく違う。
おや？　と思った時、ラッキーの兄のエースがのしかかってきた。
「あ、や……そんな！　すぐに……」
「もう、我慢できないってさ」
上村くんが笑って言う。
私にマウントしてきたエースが、激しく腰を振る。それは私の敏感な部分を何度も刺激するのだけれど、慣れているラッキーと違ってうまく入れられずにいるようだ。
「ほら、第二ラウンド」

「あぁっ、あぁぁぁっ！　やぁぁんっ！　いや――――っ！」
上村くんが手を添えてやって、エースが私の中に入ってきた。
私はまったく休息を与えられていないのに、新たなペニスが中で暴れ出している。
いつも、ラッキーと終わった後は上村くんにされちゃうけれど、その時だって一息つくくらいの時間はもらえる。だけど今日は本当に休みなしの連続エッチ。
しかも、ものすごく激しいピストン運動だった。何度となく私との行為を経験しているラッキーと違い、なんの遠慮も気遣いもない。ラッキーはあれで、ちゃんと女の子の扱い方というものを学んでいるらしい。
「ひっ、くっ！　はっ、あぁぁっっ！　あぁっ！っっっ！」
息が苦しい。
気が遠くなる。
酸素を貪ろうとだらしなく開いた口から、涎が糸を引いて流れ落ちる。
エースが、私の中で大きくなっていく。
私は、自分からぐいぐいと腰を押し付けていた。苦しいのに。
失神しそうなほどなのに。
身体は勝手に、さらなる快楽を貪ってしまう。
腰を振るたびに、悲鳴を上げて絶頂を迎えてしまう。
膣の入り口すぐのところで、大きく成長していく瘤。
子宮に注ぎ込まれる、大量の熱い精液。
まさか、一日に二度も続けてこれを味わうことができるなんて。
「あ……が……ぁっ！　……っっ！」
「ほら、もっと腰使ってやれよ」
上村くんの手が私の腰をつかんで、乱暴に揺すっる。
「――――っっ！」
私は声にならない悲鳴を上げ、ベッドの上に突っ伏した。

流れ出した涎が、真白いシーツに染みを作る。
「は……ぁ……、あっ」
乱暴に顎をつかまれて、上を向かされた。
だらしなく開いた口に、熱い、ゴムの塊のようなものが押し込まれる。
すぐに、それが大きくなったラッシーのペニスだと気づいた。上村くんが無理矢理押し込んだのだ。
「ん……ぐっ、ぅん……」
喉の奥まで届いている。気管が塞がれてしまう。
それでも私は、舌と内頬で、ラッシーへの奉仕を開始した。
相手がラッキーであれ上村くんであれ、口でしてあげるのは――あるいはさせられるのは――好きだった。
初体験以来さんざん仕込まれてきた口技で相手を悦ばせるのは、私にとっても悦びだった。
少しでもラッシーを気持ちよくさせて上げようと、精一杯頭を動かす。
その動きが下半身にも伝わって、エースと自分自身にもさらなる刺激を与えてしまう。
あそこと口を、二頭の大きな犬に犯されて。
あまつさえお尻まで、いやらしい器具で貫かれている。
ひどい。
もうめちゃくちゃだ。
学校では優等生で通っている、十七歳の女の子がするようなことじゃない。
だけどそれは、めちゃくちゃに気持ちのいいことだった。
息もできないくらい苦しいのに。
お尻だってあそこだって、大きなものが入って痛いくらいなのに。
だけど舌も腰も私の意志とは無関係に、動きをどんどん大きく、そして速くしていく。
「んっ……ぅぅっ……んっ……ぐっ！ぅぅ……」
喉を貫かれて、こみ上げてくる吐き気を堪えながら舌を動かす。
涙が溢れてきた。

苦しいのに。
気が狂いそうなのに。
早く終わって欲しいのに。
なのに、いつまでもこうしていたいと思ってしまう。
そんな相反する想いの中で、私は何度も何度も絶頂に達していた。

＊　＊　＊

それでもエースは、ラッキーよりは幾分早く終わったようだ。それとも、意識が朦朧としている私の時間感覚が狂っているだけだろうか。
もちろん上村くんは休むことを許してはくれず、半ば失神しかけている私を無理矢理起こすと、ラッシーを中に導いてきた。
「……ん、あっ！」
前の二頭と、入ってくるときの感じが違う。
そのとき私は、大変なことに気がついた。
「ちょっ、ちょっと待って上村くん！　やぁっ！だめっ！　あぁんんっ！」
太い。
すごく太い、大きなものが入ってくる。
そう。中に入れてから本格的に大きくなり始めたラッキーやエースの時とは違い、ずっと口で奉仕していたラッシーのペニスは、もうすっかり大きくなりきっていたのだ。
そしてもちろん……瘤も。
「だめっ！　だめぇっ！　むっ無理だ、って……やっ……いやぁぁっ！」
いつもは、瘤が大きくなりきる前に入れている。でなければとても入らない。
夏以来、ラッキーと上村くんに犯されまくりの私だけど、上村くんが言うには私のはどちらかといえば狭い方だそうだ。男の人の握り拳よりはいくらか小さい、というサイズの瘤がすんなり通るほどには、膣口は広がらない。
なのに……
上村くんは、強引に瘤を入れようとしている。
指で力一杯、痛いくらいに広げて。

大きなゴムボールのような瘤を押しつけてくる。
皮膚……というか粘膜が、無理矢理引っ張られる。周囲にびりびりとした痛みが走る。膣口が悲鳴を上げている。
「痛い、痛い痛い痛いいいっ！　やだっ、やめてっ！　いっ……裂けちゃう！　裂けちゃうよぉっ！」
私が泣いて懇願しても、上村くんは止めてくれない。むしろいっそう、瘤を押し込もうとする手に力を込める。
本当に、いつ皮膚が裂けてしまうかというくらい。
「ぐ……ぅ、ぎ、いいいっっっ！　ぎゃうぅっ！
ひいっ、あぁぁぁぁ――――っ！」
びりっ、と。
一瞬、今までと違った痛みが全身を貫いた。
私は肺の中の空気をすべて吐き出して絶叫した。
どっと涙が溢れる。
「あぁっ！　あぁぁっ！　あぁぁ――――っ！」
太い杭でも打ち込まれたかのように感じた。だけど違う。入ってきたものは、大きな、大きな熱い固まりだ。
痛い。
痛い。
本当に痛い。
いつもの、広げられる痛みじゃなくて。
出血を伴う、ずきずき、びりびりとした痛み。
ふと思い出した。処女喪失直後の痛みに似てる。
あれよりもずっと痛いけれど。でも、似ている。
処女の証を太い肉棒で貫き破かれた、あのときの痛みに。
だとすると……。
本当に、少し裂けてしまったみたい。
「あぁ……ばかぁ……あ！　痛い……よぉ……」
涙が止まらない。
だけど。
だけど――。
あの一瞬、私、いっちゃった。
気持ちいい、っていうんじゃないのに。
でも、いっちゃった。

やだ、もう。
ばか！　バカ！　上村くんのバカ！
こんな、ひどいことするなんて。
気が遠くなる。
ぼやけていく意識の中で、最後にちらりと上村くんを見た。
私が痛くて泣いてるのに、上村くんは楽しそうに笑っていた。
「あそこから血を流して犯されてる女の子って、バージンみたいでなんか興奮するなぁ」
……だって。
ホントにひどいんだから。
「……ばかぁ」
それだけつぶやいて、私は本当に気を失った。

「上村くんのバカぁ……ホントに死んじゃうかと思ったんだから……」

上村くんの背中にしがみついて、私は涙目で言った。

疲れ切って泥のようになった身体に、夜の冷たい風が心地よい。

私は家までの道を、上村くんに背負われて帰っていた。

＊　＊　＊

意識が戻った時には、もうすべてが終わった後だった。

ラッキーたち三頭は、罪のない幸せそうな顔で床に寝そべっている。

汗と、涙と、涎と、精液と、愛液と、そして血で汚れてドロドロ、ぐちゃぐちゃだったはずの私の身体は、上村くんが綺麗に拭いて服も着せてくれていた。

あそこの傷も消毒して、傷薬を塗ってくれたらしい。まだ、ヒリヒリズキズキと痛むけれど。

私は心も身体も疲労しきっていて。

腰が抜けていて、脚にも力が入らなくて。

とても、立って歩くなんてできなかった。

そんな私を見て、上村くんが送っていってくれると言った。

秋の北海道は日没が早い。外はもう真っ暗だった。

エッチしていた時間と気絶していた時間、合わせて四、五時間くらいだろうか。上村くんの家族が帰ってくる前に終わってよかった。たとえ扉を閉め切っていても、私の悲鳴は家中に響いただろう。

そういえば、叫びすぎたせいか喉も痛い。

それに、下半身がスースーする。

上村くんは制服は着せてくれたのに、下着は着

けさせてくれなかった。私は今、ノーブラ、ノーパンで上村くんにおんぶされている。
これでは、いつなんの拍子にお尻が見えてしまうかわからない。なのに「それが楽しい」なんて言ってる。万が一のとき恥をかくのは、上村くんも一緒なのに。
肉体関係を持つようになってから二ヶ月近く。
よくわかった。
上村くんって、すごくエッチで、サドで、そして鬼畜なんだ。
それを受け入れてしまう私にも、ちょっとは問題があるかもしれないけれど。
でも、嫌じゃない。
痛いとか、恥ずかしいとか、苦しいとか思うことはあっても、本当に嫌だとは感じない。
認めたくはないけれど、わかっている。私もかなりエッチで、そしてマゾなんだ。
だけど別に、すすんで苛められたい訳じゃない。もしも上村くんが優しくエッチしてくれたとしたら、それはそれですごく感じると思う。もちろん、実際にはあり得ないことだけれど。
上村くんの女性経験は、私で四人目だと聞いたことがある。私以外の人たちにも、こんなことしてたんだろうか。少なくとも、ラッキーとしたのは私が最初なんだけど。
それとも、前の彼女とはノーマルなエッチに飽き足らなくなって別れたとか？　ありそうな話かも。
私はぼんやりとそんなことを考えながら、上村くんの背中で揺られていた。
幸い、誰にも会わずに家に着くことができた。二人の家の間は徒歩五分。夜の郊外の住宅地なんて、人通りも少ない。
門を入ったところで、ほっと息をついた。ここまで来れば、今いきなり突風が吹いたとしても大丈夫。
家は、玄関の外灯以外の明かりが消えていた。父と母は留守のようだ。
私は上村くんにおぶさったまま、制服のポケットに入っていた鍵を渡して玄関を開けてもらう。

靴箱の上に、母が書いたメモがあった。
『今夜はパパと二人でで・ぇ・と。帰りは遅くなるから、勝手にごはん食べてなさい』
「……おまえの両親、仲いいんだな」
メモに目を落とした上村くんが、少し呆れたように言う。
「娘が恥ずかしくなるくらい、ね」
私は恥ずかしいのを隠すために、わざと冷たく言った。まったく、あの両親ってば。いい歳して、いつまでもラブラブなんだから。
でも、今日に限っては好都合だ。まだ、ちゃんと立って歩くことはできないし、そのまま二階の私の部屋まで抱いていってもらった。
私を寝かせて、上村くんはベッドの端に座る。
「そういえば、委員長の家に入るのって初めてだな」
「……そう、だね」
いつも、上村くんの家だったから。だって、お目当てはラッキーなんだから。
横になると、一気に疲労が押し寄せてきた。眠くて、口を開くのも億劫なくらい。
「今日はさすがに、無理させすぎたか？」
そっと、髪を撫でてくれる。彼には珍しく、優しい仕草だった。
「ん……。ちょっと、ね」
本当はちょっとどころではなくて、身体にはまるで力が入らないし、意識は朦朧としてるし、あそこもお尻もひりひりと痛いんだけど。
でも上村くんが優しく撫でてくれているので、あからさまに文句を言う気もなくなってしまった。
このまま、眠るまで撫でていてくれたら嬉しいんだけど。
だけど。
そうはならないところが鬼畜の上村くん。
「やっぱり、俺も我慢できないな」
そう言って、私の上にのしかかってくる。
「え」
いきなり、スカートをまくられた。下着を着けていない下半身が露わになる。脚を広げられて、上村くんはズボンのファスナーを下ろして……。

「え、ちょ……ちょっと！　……っ」
なんの前振りも前戯もなしに、上村くんが入ってきた。それでも私のあそこはまだ潤いが残っていたらしく、比較的スムーズに彼を受け入れていた。
そういえば。
今日は、上村くんとはしていなかった。
いつもなら、ラッキーと結合している間にたっぷりと口で奉仕させられて。その後、何度も何度もやられちゃうんだけど。
今日は初心者が二頭いるということで、彼はサポートに徹していたのだ。
だけど、エッチで精力絶倫の上村くんのこと、私があれだけめちゃくちゃにされているところを目の前で見て、我慢できるはずがない。
今だって、前戯もなにもなしにいきなりなのに、彼のものはすごく大きくて、熱くなっている。
こんなのを入れられたら、いつもは絶叫ものなんだけど。
私は、なにも感じていなかった。

今日は、もうだめ。
やりすぎで、疲れ切っていて、麻酔が効いているみたい。「ああ、太いものが入っているんだな」ってのはわかるんだけど、あの、悶え狂うような快感が襲ってこない。
「だめぇ……今日は……もう……」
力のない私の抗議をよそに、上村くんは激しく腰を揺すっている。
「委員長は寝てていいよ。勝手にやるから」
「勝手に、って……ばか。今日は、全然よくないっしょ？　その、私の……緩くなってない？」
あんなに何度もして、大きな瘤を入れられて、ちょっと裂けちゃって。
「全然。いつもと変わらず、柔らかくムチムチと包み込んでくるぞ」
「……そう？」
それはちょっと安心、かな。
そんな私にはお構いなしに、激しいピストンは続いている。入り口から奥まで激しく擦られ、行き止まりをずんずんと突かれる。

「痛いか？」
って、そんな乱暴に腰を打ちつけながら訊かれても困る。彼の動きは普段よりも激しいくらいだ。
「ん……ちょっと、ね」
私は微かに顔をしかめた。
また、傷が開いたみたい。
本当なら、大きな彼のもので激しく突かれる痛みと、傷の痛みとで、泣き叫ぶくらいのはず。だけど正直、今の私は痛みもろくに感じない状態だ。
下腹部の奥に、鈍いズキズキとした痛みがあるだけ。
それでも上村くんは、息を荒くしていっそう激しく腰を動かす。
「悪ぃ。ちょっと我慢しろよ」
「ん……、ぁ……、……ん」
いつもなら私の泣き叫ぶ声にかき消される音が、今日はいくつも聞こえる。
結合部が立てる、かき混ぜられた愛液がくちゅくちゅと泡立つ音。
上村くんの荒い息。
軋むベッドのスプリング。
その中に混じる、私の微かな吐息。感じているんじゃなくて、動きに合わせて肺の空気が押し出される音。
そんな物音とは別に、なにか違和感があった。
上村くんの顔が、目の前に見える。
そこではっと気づいた。
正常位でしている。
これって、上村くんとは初めてだ。
上村くんは私を犬扱いしているし、するのはラッキーが終わった直後だから、いつも後ろから、いわゆるわんわんスタイルだ。
四つん這いか、膝だけ立てた俯せかの違いはあっても、それ以外の姿勢でなんてしたことない。
それに今は尻尾はもちろん、耳も、首輪も付けていない。学校の制服を着たまま、下着だけ脱いだ格好で上村くんに犯されている。
いつもの私は牝犬だけど、今、上村くんと初めて「人間の女の子」としてエッチしているのだ。
そう考えると、なんだかドキドキしてきた。

日常の一部となっているはずの上村くんとのエッチなのに、ひどく緊張する。
初めて見る。私を犯している時の、上村くんの顔。
きっと普通に正常位でしても、こんな冷静に観察することはできない。ほとんどなにも感じない、今だからこそ。
上村くんはうっすらと汗ばんで、荒々しく私を貫いている。
私はただ黙って、仰向けに寝て貫かれているだけ。
あそこの中で、上村くんが暴れてる。すごく固くて、大きくて、熱い、彼の分身が。
私の胎内をかき回している。
動きが大きく、速くなっていく。
もうすぐ、いくんだな。そう、冷静に考えることができた。
あと、十秒くらいだろうか。
九秒、八、七、六……
秒読みする。

心の中で「ゼロ」とつぶやいた瞬間、私の身体の一番深い部分で、彼が弾けた。
びくっ、びくん！
大きく脈打って、熱い精を吐き出している。
数秒間、身体をこわばらせていた上村くんが、ふぅっと大きく息を吐き出した。
彼は私の中から引き抜いたものを、そのまま口に押し込んできた。私はいつもそうしているように、白濁した粘液で汚れたそれを舌で綺麗にしてあげる。別に美味しいとは思わないけれど、その行為自体は別に嫌いじゃない。
「……ごめんね。私、なんにもできなくて。あまりよくなかったっしょ」
汚れを綺麗に舐め取った後で、私は一応言った。彼が勝手にやったことなのだから私が謝る必要はないとは思うけれど、反応しない女の子相手に一生懸命になってる彼の姿がなんだか可笑しくて、上村くんもちょっと可愛いところあるかな、なんて思ってしまったのだ。
「いや、これはこれでちょっと面白かったな」

上村くんも笑って言う。
「……ダッチワイフって、こんな感じかね？」
「な……っ！」
私は絶句した。何も言えなくなった。
初めて「人間の女の子としてエッチしてる」ってドキドキしてたのに、上村くんはダッチワイフ扱いしてたなんて！
そりゃあ、私は毎日牝犬扱いされてる。だけど、あれは好きでやっていることだし。上村くんは、ペットには愛情を注いでくれるし。
なのによりによって、ダッチワイフに格下げ？
って、ひどすぎる。
「じゃ、俺帰るから。お休み」
「……まって！」
やること済ませてさっさと帰ろうとする上村くんを、思わず呼び止めた。
「ん？」
扉のところで振り返る上村くんを見て、私は考える。
さて、なんと言ってやろう。

ダッチワイフ扱いなんてひどい……と、面と向かって文句を言ったって、彼にはまるで堪えまい。
だから、作戦を変えた。
「……、もうちょっと、いて」
はにかむような、甘えた声で言う。上村くんが微かな笑みを浮かべた。
「一人が怖いのか？」
「ううん」
私は首を振る。
「あの、さ。一時間くらい休めば、ちゃんとできると思うから……今晩、パパとママは遅いし……だから、その……」
台詞の後半を言い淀むと、上村くんはさも可笑しそうに言った。
「まだしたいのか？　今日はあれだけしたのに、欲張りだな」
呆れたような、私をバカにしたような口調。だけど、どこか嬉しそうでもある。
「そんなんじゃないもん」
わざと、ぷんと膨れてみせる。

「……もうちょっと、一緒にいたいな。……それで、ちゃんと……したい」
上目遣いに、縋るような瞳。
まさか、私にこんなことができるなんて。
これで、上村くんは騙されるだろう。私が上村くんのことが好きで、一人にされるのを嫌がってるって。
だけど、違うんだよ。
むしろ、逆。
だって、悔しいじゃない。モノ扱いされて、それで終わりなんて。
私にだって、女のプライドってものがある。
見てなさい。もう二度と「ダッチワイフ」なんて言えないくらい、気持ちよくしてあげるんだから。
めちゃめちゃ感じさせて、向こうから「もっと」って言わせてやるんだから。
でも、そのためにはちょっと休息を取らなきゃね。
「……おねがい」

「ああ、いいよ」
上村くんは優しく微笑んで、隣に横になった。
私の頬を指先で突っつく。
「じゃ、一時間だけ寝かせてやるから。その代わり、後でたっぷりサービスしろよ」
「ん」
私は上村くんに寄り添って目を閉じた。
上村くんの体温、呼吸、鼓動を感じる。
彼の腕枕で眠るのって初めてだけど、これってちょっと……、ううん。
すごく、気持ちいいかも。

閲覧に関する注意事項

このＰＤＦファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

●モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Ｅｎｔｅｒキー（Ｒｅｔｕｒｎキー）で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合（１２８０×１０２４以上）、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、１ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの方が適しているかもしれません。（その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです）どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

●印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはＢ５を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「２ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。（縮小してＢ６用紙に印刷するのでも可）

アクロバットのバージョンが４の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われますのでご了承ください。